

## 「唱歌にみる季節の情緒」



高野辰之は『故郷』のほかにも『朧月夜』『紅葉』『春の小川』等の詞を詠んだ。文学博士の栄を受け、天皇皇后陛下にご進講もした。丸顔に口髭、でっぷりとした腹。いかにも押しが強そう。まさに、こころざしを果たして故郷に戻った。

作曲者は岡野貞一。鳥取市の没落士族の家に生まれ、早くに父を亡くす。岡山の姉の世話になりキリスト教系の学校へ通う。ここで音楽の基礎を学び東京音楽学校へ。母校の教授として、音楽教育に身を捧げた。瘦身で細面。万事控え目でもの静かな人だった。対照的な二人。ある時期、偶然、唱歌教科書編纂委員となり、史上に残る名曲が生まれた。

岡野は43年間、日曜日には本郷中央教会でオルガンを弾き、聖歌合唱を指導した。『故郷』には讃美歌のメロディが入っていると言われる。漱石の『三四郎』の末尾近く。教会の外で美禰子を待つ三四郎が讃美歌の合唱を聞く。察するにここは本郷の教会。であれば、合唱指導もオルガン演奏も岡野に相違ない。何よりも漱石自身が岡野のオルガンを聞いていたからこそ、このくだりが書けたのだろう。

『朧月夜』は最高傑作だろう。一番は菜の花畠に 入日薄れ 見わたす山の端 霞ふかし 春風そよふく 空を見れば 夕月かかりて にほひ淡し。北信濃に春がきた。千曲川沿いに菜の花の黄色い絨毯が広がる。日本の春は水蒸気が多い。あたり一面ぼおつと霞んだ夕暮れ。花畠の西に日が沈み、東から月が出る。蕪村の俳句的世界が広がっている。春の田園風景はまさに一幅の画のようだ。

二番は、里わの火影も 森の色も 田中の小路をたどる人も 蛙のなくねも かねの音も さながら霞める朧月夜。灯火・森・人という見えるものと、蛙と鐘の音という見えないものが溶けあっている。視覚と聴覚が渾然一体となる。やがて夜の柔らかな気配に包まれ、どこかなまめいた雰囲気漂ってくる。

そういえば、かつて、後はおぼろ：後はおぼろ：とハスキーな声で魅了した女性歌手がいた。脱線したか！朧には視覚と聴覚の境がない。風鈴の音が涼しいとは、聴覚が皮膚感覚に及び、ひいては五感相互の越境を意味している。

感覚の境界は曖昧でいい。これが日本語の特質のひとつであり、朧とは日本人の美意識を表す象徴的言葉であろう。『朧月夜』は高野自身の体験と記憶が基にあるのは当然だが、日本人に刻まれている風土感覚が表現されているように思える。

秋の夕日に照る山紅葉：山のみもと 裾模様。溪の流れに散り浮く紅葉：水の上にも織る錦。『紅葉』には山々の紅葉、谷川に散り水面を彩る紅葉の情景を詠っている。山のみみじと川のみみじ 裾模様と錦模様。夕日に映える山々を遠景にし、溪流に散り浮かぶさまを近景にしている。実に巧みな対比だ。

『朧月夜』には心地いい大和言葉が散りばめられ、『紅葉』では文語体の簡潔さ、美しさが際立っている。現代は話し言葉による文章が一般的。だが、山のみもと 裾模様 や、水の上にも織る錦 を口語体にする、回りくどい説明になり、秋の美的情緒が失われる。

文語体は、短い言葉で本質をつく。余韻があり、想いがふくらみ、表現の幅が広がる。文語は短歌などに用いられ、俵万智の現代風な歌にもまじっている。文語体は日本人が作った芸術性の高い表現様式。『舞姫』は鷗外が留学中の恋を高雅な文体で著したもの。アンデルセンの通俗的小説を流麗な文語で翻訳し、一気に芸術性豊かな『即興詩人』に仕上げた。私は難解な漢語に息も絶え絶えだった。

日本人固有の美意識と情緒性に通じていた高野辰之。敬虔なキリスト教徒として、優れた音楽的素養を備えた岡野貞一。情感溢れた詞と美しい旋律が子どもの感性を磨き、日本的心性を形づくってきた。